



## 地域の国際化セミナー2022 エンパシー(共感)が人をつなぐ

3月12日(土)に開催した「地域の国際化セミナー2022」(協力:愛知県芸術劇場)。テーマは「エンパシー(共感)」。エンパシーとは、相手の気持ちをすべて理解することは難しいということを前提に、相手の想いを想像し理解することだと言われます。ゲスト対談を通じて相手と向き合う姿勢について考えるとともに、演劇ワークショップによる「エンパシー」の体験で、理解を深める機会となりました。

### 多様な人々と向き合うために

第1部は、ライターでウェブマガジン「ニッポン複雑紀行」編集長の望月優大氏と、多文化共生教育を演劇で実践する芸術文化観光専門職大学の飛田勘文氏をお迎えしての対談。他者と向き合うとはどのようなことかを解きほぐす対話となりました。「ニッポン複雑紀行」の取材の中で、さまざまな人と丁寧に向き合ってきた望月さんは、「多様な人とは誰を指すか。日本人も含め、誰もが多様なのでは」「だからこそ共生を考えるとき、外国人を一括りで見のではなく、一人ひとりの違いに目を向けることが大事」「相手への共感、自分を深く知ろうとするところから始まる」と話しました。これを受けて、飛田さんは「相手を完全に理解しようと無理をしなくていい。自分も大切にしながら、自分自身の経験との共通点を見つけていけばよい」と語りました。さらに「他者を演じることで『自分が相手の立場だったら...』と考えを巡らせることができる」と第2部のワークショップの意義についても言及しました。



▲対談の様子(左:飛田勘文氏、右:望月優大氏)

### エンパシー(共感)を体験する



▲語り部の黒田ベリンダさん(一番左)の声に耳を傾ける参加者

第2部は、飛田さんによる演劇の手法を取り入れたワークショップを行いました。ペルー出身の黒田ベリンダさんが語ってくれた自身のエピソードを参加者たちが演劇で表現しました。20年前の来日当時に感じた孤独感や、シングルマザーとして息つく間もなく子育てと仕事に追われた日々、そんなときに支えてくれた職場の社長との出会い、自分の子どもが学校の先生から受けたいじめなどさまざまなエピソードを赤裸々に語ったベリンダさん。参加者は、これらの場面を演じることで、ベリンダさんの痛みや喜びを言葉以上に心や身体で感じました。中には、自身の過去の経験を重ねて胸を痛め、涙ぐむ人も。参加者からは、「嫌なことを言う人を演じてみて、言う側もこんなに辛いのだと実感した」「エンパシーは、他者と自分の、そして自分との対話のプロセスそのもの」などの声寄せられ、異なる背景を持つ人への自己移入や共感を体験する機会となりました。

### ～参加者の演技の様子～



▲手を挙げて先生に当ててもらえない息子を見つめるベリンダさん



▲社員食堂で孤立するベリンダさん

異なる背景や価値観をもつ人と認め合いながら、共に生きることは、容易なことではありません。自分との違いや共通点を探りながら、相手の立場や気持ちを理解しようとするエンパシーの姿勢は、同じ地域に暮らす外国人に限らず、家庭や職場、近所、学校などあらゆる場面で、他者と向き合うために誰もが踏み出せる、はじめての一步ではないでしょうか。



特に目的があるわけではないけど、ぶらっと来てみたら、気になることに出来る場所。このコーナーでは毎回、NICライブラリーを紹介をします。

## 寄贈本にも支えられているNICライブラリー

NICライブラリーでは、絵本やペーパーバック、マンガなど、たくさんの“外国語の本”を揃えています。ジャンル、言語ともにバラエティーに富む蔵書は、この地域でも屈指のもの。その豊かさを支え、月2回開催の「外国語で楽しむ絵本の会」でも大活躍しているのが、利用者から持ち込まれる寄贈本です。

「帰国するので、母国から持ってきた本を寄付したい」、「海外で買ってきた本を、多くの人に活用してほしい」、「母国で買ったけれど、子どもが大きくなったので、今度はこの地域の子どものために読んでほしい」など、寄贈の経緯や理由はさまざま。日本では入手が難しい本も多く、NICライブラリーをより特色ある図書室にしてくれています。

寄贈本は、ボランティアによるデータ登録、保護フィルム貼りなどを経て本棚へ。残念ながら傷みが激しかったり、既に同じ本があるなどの理由で置けない場合は、「本のリサイクルコーナー」でその本を「持っていたい」と思われる方との出会いにつながります。

海外での思い出や語学学習のために購入したけれど、本

棚に眠ったままの外国語書籍はありませんか?もしよろしければ、NICライブラリーへご寄贈ください。あなたがその本を手にとった時のワクワクドキドキを、NICが本棚やリサイクルコーナーから、次の読み手へと橋渡しします。

※6月1日(水)から期間限定で「本のリサイクルコーナー」を拡大しています!ぜひお立ち寄りください!

☎ライブラリー 052-581-0102

リサイクルコーナーは、ライブラリー入り口にあります。



▲新たな出会いを待つ外国語の寄贈本



## 留学生生活を振り返って ～大好きな名古屋に感謝の気持ちを伝えたい～

南山大学国際教養学部 卒業(3月)

フィン ティ ハ フォンさん(ベトナム出身)

ザット ヴーイ ドック ガップ アイン  
Rất vui được gặp anh  
お会いできて嬉しいです



私は2016年来日し、2018年4月に南山大学に入学しました。日本に留学した理由は、母国の企業に勤めていた時の上司が日本人で、彼女の他人思いの人柄に惹かれ、自分も日本の文化や風俗習慣に触れたいと考えたためです。

国際留学生会館(以下「ISC」)へ入居したのは昨年2月、大学3年生の時です。入居のきっかけはベトナムと日本との高等教育事情の違いからでした。ベトナムでは大学3年生で就職が決まり、4年生から勤務することが多く、並行して大学の単位を取得して卒業します。私は既に母国で就職が決まっており、帰国の準備中でした。大学の授業はオンラインだったため、帰国して働きながら卒業を目指す予定でした。



▲藤前干潟清掃活動でメディアの取材を受ける(昨年10月・右がフィンさん)

しかし大学の方針が変わり、4月から対面授業となったため、4年生の1年間は通学する必要が出てきました。

卒業を目指すためには、母国の企業を辞退しなければなら

ません。もしくは大学を中退して帰国したほうが良いのか。散々悩んだ末に企業を辞退し、卒業を目指すことにしました。苦渋の決断でしたが、将来的にも日本で大学を卒業し、学位を取得した方が自分のキャリアアップにつながると思いました。また、来日以来、名古屋に暮らし、人々と独特の文化に慣れ親しんでおり、愛着もありました。新たな希望を胸に心機一転ISCへ入居し、卒論や就活にも集中することができました。3月には無事卒業を迎え、東京の企業への就職も決まりました。ISCでの留学生同士の交流やボランティア活動の機会は、自分自身に更なる刺激や成長を与えてくれました。

私の留学生生活を支えてくださった名古屋の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。



▲2022年退去者お別れ会(今年3月・右から4番目がフィンさん)

### 国際留学生会館とは…

NICが2001年から管理・運営している、留学生専用の宿泊施設(名古屋港区)。居室90室のほか研修室や和室、体育室などを備え、100名の留学生が生活できる。日本文化理解講座の開催や各種相談・情報提供、地域住民との交流などを行っている。